

## 最後の写真

大学の授業でカメラが必要になった。写真を撮って、提出しなければならぬ。カメラを持っていなかった私は、どうするべきか考えた。

ふと、写真が大好きだった祖父を思い出した。祖父の写真は美しく、やさしく、ドラマチックだった。よくコンテストなどにも入賞していた。そんな祖父がこの世を去ってから五年、あのどっしり重いフィルムカメラは、物置にしまわれたまま、誰も使っていないかった。思い立ってすぐに祖母に交渉してみると、快く貸してくれた。「大切に使ってね」と言われた。もちろん、そうするつもりだった。

ネットで使い方を調べていると、あることに気がついた。

カメラの中にフィルムが残っている。全部現像したはずの祖父の写真が、誰の目にも触れずに、このカメラに眠っている。十四枚だけ、使われた状態で。

あわててフィルムを巻いて、写真屋で現像してもらったことにした。

翌日、祖父の最後の写真が姿を現した。蝉の羽化、夏祭り、花火大会……。それらは、祖父が大好きだった、夏のきらめき達だった。こんなにも息をのむような一瞬を、祖父の眼は捉えていた。祖父だけの世界と刹那が、鮮明に写し出されていた。

私は、心を打たれた。祖父は死して尚、作品は今を生きるということを伝えてくれた。作品と共に、祖父の魂は私の中で確かに生きている。

それからずっと、祖父のカメラで写真を撮っている。便利なデジタルカメラがたくさんあるが、私はこのカメラにしか捉えられない瞬間があると信じている。祖父の意志と、重いカメラを背負って、明日も外に出る。

次のシャッターチャンスは、いつだろう。